すっかんぽ

☆ 研究室だより No.6　　1992年 10月号

ライトトラップ作戦の巻

朝型のアミメカゲロウのニュースは、全国各地の研究者の間にすぐに広まっていった。　しかし、まだにわかには信じがたいといった感があり、事実、直接飛んでいるところをまだ見ていない私にとっても、半信半疑であった。

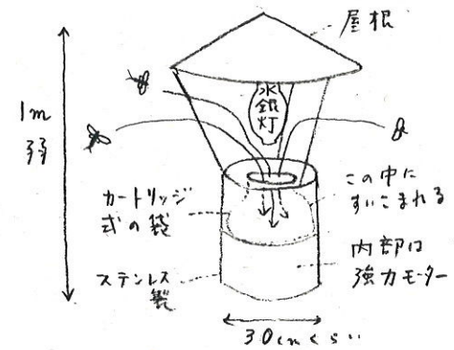
宇都宮大学　生物学研究室の中村先生が、群飛を確認した翌日、今度は2人で朝の2時半から待ちかまえていた。　しかし、どういうわけか、川に付けた車のヘッドライトの光に集まってきたアミメはたったの数匹。

こうした状況を打ち破ってくれたのが、神奈川県環境科学センターの石綿進一さんの登場であった。石綿さんは、カゲロウを中心とする水生昆虫の専門家で河川の水質調査などの仕事としている方である。

9月8日、午後6時ころ　石下橋に着くと、すでに、カゲロウを捜している人がいた。　石綿さんとは初対面であったが何となく、「この人が石綿さんだな」と思わせるところがあった。　そして、白いワゴン車の中には、カゲロウ採集の秘密兵器が隠されていたのであった。

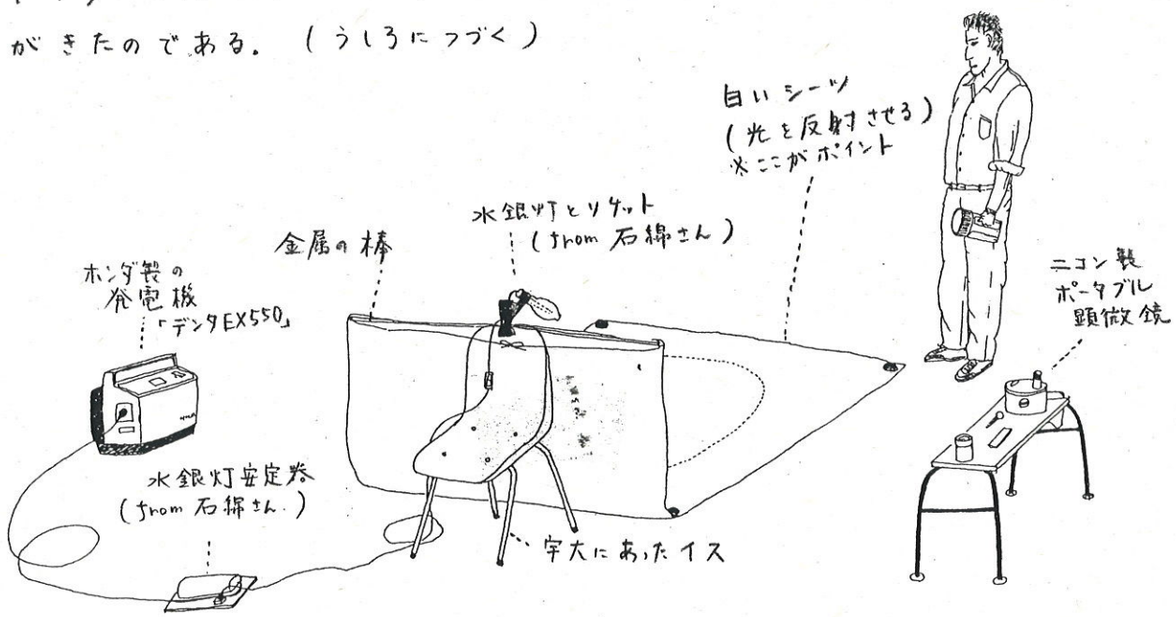
こっちが車のヘッドライトなのに対し、石綿さんは、発電機をとり出しその電源を利用し、水銀灯を点灯させているのである。しかも水銀灯の下には、モータで回転するファンがとりつけてあり、集ったカゲロウを、そうじ機のように、吸いとってしまおうというのだから驚きである。

そして、その威力たるや、すばらしいもので、ヘッドライトとは比べものにならないくらい、カゲロウが集まってきた。　私は、一種のカルチャーショックのようなものを感じてしまった。



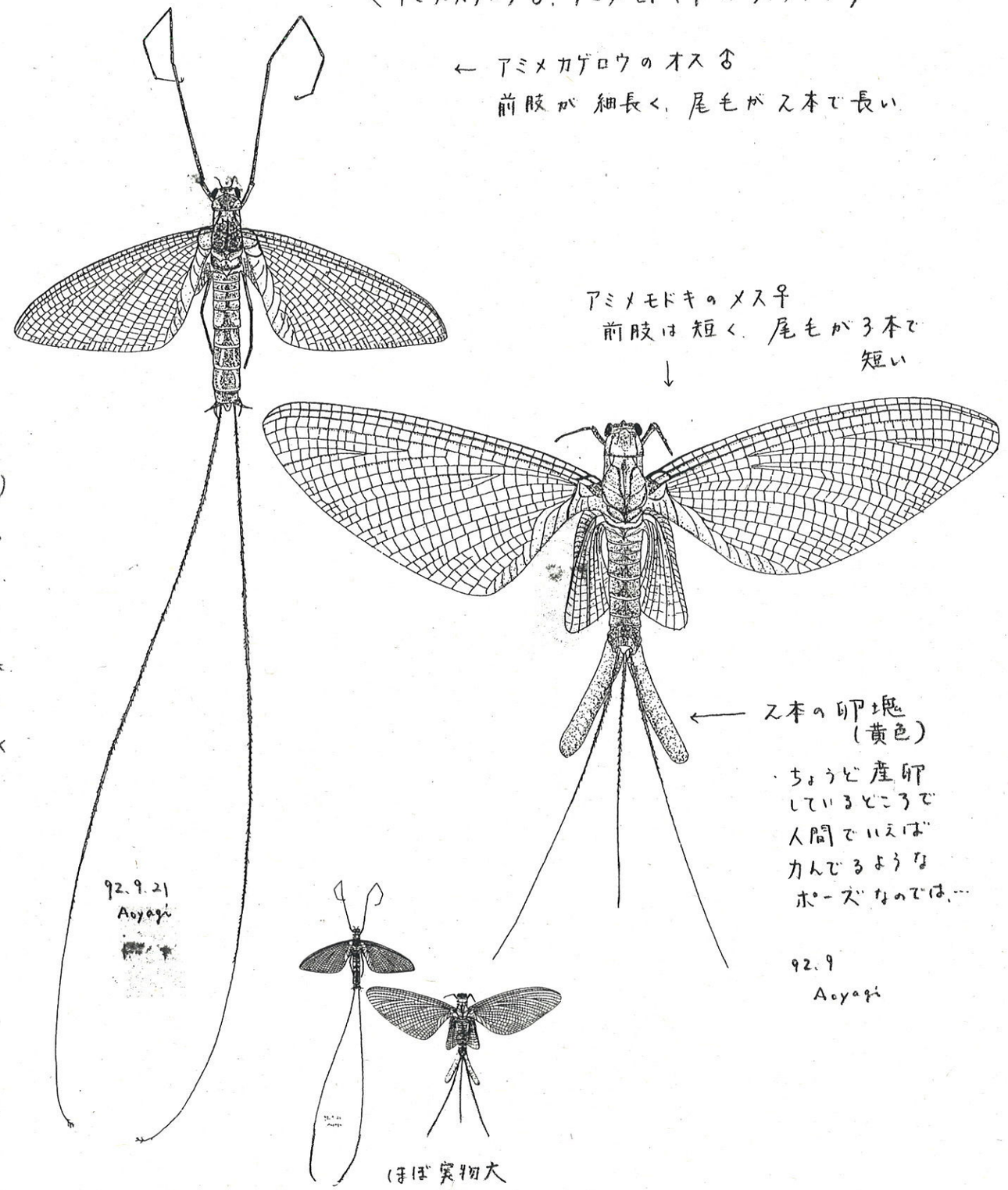
聞くところによると、この装置は、石綿さんが設計し、業者につくらせた物で、数万円はかかっている。　あまりにすばらしいので、「いいですねー」とうらやましそうに見ていたら、「これ、前に使ってたやつだけど、あげますよ」といってくれたので、うれしかった。

やっぱりいろいろ聞いてみるもんだなぁと思わずにはいられなかった。　この日を堺に、我々の対アミメ戦略は、飛躍的なレベルアップをとげた。　石綿さんからいただいた水銀灯を使って、中村先生と考案したのが、下の図の〈宇大式ライトトラップ1号〉である。　そして翌9日、ついにこの装置の威力を試す時がきたのである。（うしろにつづく）



翌 9月2日 昨日の結果を神奈川県の石綿氏にファックスで報告し、夕方、中村先生と現場でおち合い、実際にアミメが飛来してくるか、調べることとなった。この時点では、アミメは夕方から夜にかけて出る、という固定観念があったので、何の疑いもなく、夕方調査しようとしたのである。8時までいて飛んできたアミメは、全部で10匹くらいであった。
もう大発生の山は越したのだろうと判断した。

9月3日、恩怒川流域の他の橋でもアミメが発生していたかどうかを橋に残っているであろう残がいで調査してみた。宇都宮市内から茨城県内の利根川合流部までの約70kmにおよそ20の橋がかかっている。その中で残がいがあったのは、石下橋を中心とする8つの橋(約30kmの範囲)にわたっていた。こうしてみると、かなり大規模に発生がおこっていたらしい。「もう少し早く気がついていれば…、今となっては、来年の発生を待つしかない…」と半分あきらめかけていた。
最初に、カゲロウの情報をくれた、下館工事事務所の長塚さんに今までの結果を中村先生が報告すると、まさに目からウロコが落ちるような言葉が返ってきた。「何言ってんの。夕方じゃなくて、朝だよ、朝。朝の6時ごろには、もう終わってるよ。」
我々の頭には、アミメ＝夕方という先入観があって、最初に、朝でますと言われたにもかかわらず、まず従来通りの夜の調査で判断してしまっていたのだ。

9月5日 朝4時45分、中村先生が石下橋に着くとすでに、水銀灯の下では、カゲロウが黒い塊となって群れ飛んでいた。朝うゴメし、大発生する新しいタイプのアミメカゲロウが、我々の目の前に姿を現わした、最初の瞬間であった。
※ 後日、この朝型のアミメカゲロウは、今までの夜型とは別種であるらしいことが判明し、現在、アミメモドキ(仮称)と呼ばれている。(次号へつづく)

〈アミメカゲロウ♂、アミメモドキ♀のスケッチ〉